

日本の大学におけるロシア語能力検定試験実施の試み

An approach to introducing the Test of Russian as a Foreign Language into language classes at Japanese universities

北 岡 千 夏

When it is an undeniable fact that language education at Japanese universities today is far from satisfactory, something must be done to improve it in introductory classes of a given language. The point lies in what we should do. In this respect, as far as Russian is concerned, the Test of Russian as a Foreign Language (TORFL), established in January 1998, is of a lot of help. Happily enough, TORFL has recently been utilized at some universities in Japan so as to grasp the problems that the classes and the students are facing with. In this paper we would like to point out some of the problems which have been revealed through the statistical analysis of those TORFL results.

はじめに

1998年1月、ロシア教育省内に「外国人のためのロシア語能力検定試験」のシステム開発委員会が設立され、ロシアの大学に入学を希望する外国人の語学能力検定「外国人のためのロシア語能力検定試験」が開発、作成された。¹⁾

この試験を、筆者が担当するロシア語のクラスの学生に試みた。この試みの目的は、大学における外国語教育において、初習外国語に関して、その目標を「読み、書き、話す、聞く」という総合的な言語運用能力の習得とする場合、筆者の担当するクラスの条件では、どの程度までその目標の達成が可能なものであるのかをはかることと、現状として達成の難しい点があるとするならば、授業シラバスに関してどういった工夫をほどこして行けばよいのかということを知る手がかりにこの試験実施結果データを利用することである。

以下のクラスで試験を行った。1年次週3コマ(90分)、2年次週2コマ、3年次週1コマの授業でロシア語を第1外国語として学ぶ1年生の1クラス(本稿ではグループAとする)。1年次週2コマ、2年次週1コマの授業でロシア語を第2外国語として学ぶ2年生の2クラス(本稿ではグループBとする)。さらに、専門でロシア語を学ぶ1年生の3クラスのデータを比較データとして参照する(本稿ではグループCとする)。

1. ロシア語能力検定試験の概要

試験は、「文法・語彙力」、「読解力」、「筆記によるテキスト作成」、「聴解力」、「口頭による言語使用とインターアクション」という5つの領域が設定されており、以下の表のとおり6つの段階が設定されている。

「外国人のためのロシア語能力検定試験」の各レベルにおいて要求される熟達度と資格認定内容

初級レベル	ロシアの日常生活に必要な初歩的なコミュニケーション能力	
	必要とされるロシア語学習時間	100-120 コマ (1 コマ = 45 分。以下同様)
	必要語彙数	780 語
基礎レベル	ロシアの日常生活、社会・文化、学習領域等の限られた状況下での必要不可欠なコミュニケーション能力	
	必要とされるロシア語学習時間	初級レベル + 180-200 コマ
	必要語彙数	1300 語
第1レベル	仕事、学習、休暇の場面における基本的なコミュニケーション能力	
	必要とされるロシア語学習時間	
	基礎レベル + 160-180 コマ以上 総時間数 440-460 コマ以上	
	必要語彙数	2300 語
	資格認定内容	ロシア国内の大学の学部入学に必要な語学能力
第2レベル	あらゆる分野における高度のコミュニケーション能力 特に人文系、技術工学系、自然科学系の専門分野でロシア語使用を前提とする職業従事に必要な総合的語学能力	
	必要とされるロシア語学習時間	
	ロシアの高等教育機関において第1レベル + 720 コマ以上 (一般的ロシア語能力 380 コマ、専門領域に関するロシア語能力 340 コマ)	
	必要語彙数	10000 語 (active 語彙 6000 語)
	資格認定内容	自然科学、人文、技術工学、経済学の学士及び修士号授与の要件 (文献学、通訳・翻訳、編集、ジャーナリスト、外交官、商業マネージメントの分野を除く)
	あらゆる分野における高度のコミュニケーション能力、特に文献学、通訳・翻訳、編集、ジャーナリスト、外交官、商業マネージメントの専門分野でロシア語使用を前提とする職業従事に必要な総合的語学能力	
第3レベル	必要とされるロシア語学習時間	
	ロシアの高等教育機関において第2レベル + 280 時間以上 (一般的ロシア語能力 120 コマ、専門領域に関するロシア語能力 160 コマ)	
	必要語彙数	12000 語 (active 語彙 7000 語)
	資格認定内容	上記の分野の学士号、修士号 (ただし修士号についてはロシア語文献学を除く) 授与の要件

・第4レベルに関しては、目下システム開発委員会で試験そのものを開発中である。

2. ロシア語能力検定試験の試み

この「ロシア語能力検定試験」の詳細については、それぞれのレベルごとに、目標（項目ごとにどのような具体的能力をテストするか）、テストの構成と各項目の内容、実施要綱、評価基準が実施者向けに解説された問題集が1999年にロシア教育省より出版されている。この問題集を利用して、テストを実施した。それぞれのクラスの試験結果、及び、授業プログラム、クラスサイズは以下の通りである。

グループ A

授業プログラム

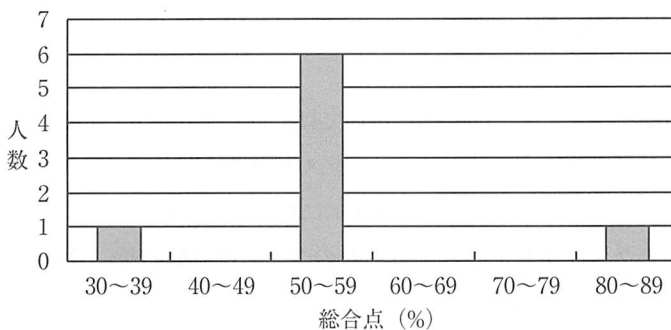
授業時間数	1年次 週3コマ（2コマ日本人教官、1コマ外国人教官） 2年次 週2コマ（1コマ日本人教官、1コマ外国人教官） 3年次 週1コマ（日本人教官）
クラスサイズ	8名
試験実施日	2001年1月（1年次終了時）

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－1 a

	文法・語彙	%	読解	%	聴解	%
受験者数	8.00		8.00		8.00	
合計点	100.00		120.00		100.00	
平均値	56.75	56.75	75.00	62.48	48.75	48.75
合格ライン達成者数	1.00	12.50	1.00	12.50	1.00	12.50

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－2²⁾

	文法・語彙		読解		聴解		総合点
	/100	%	/120	%	/100	%	
1	53	53.0	68	56.7	40	40.0	50.3
2	60	60.0	88	73.3	40	40.0	58.5
3	78	78.0	112	93.3	85	85.0	85.9
4	50	50.0	40	33.3	25	25.0	35.9
5	51	51.0	72	60.0	40	40.0	50.9
6	50	50.0	68	56.6	45	45.0	50.9
7	52	52.0	76	63.3	60	60.0	58.8
8	60	60.0	76	63.3	55	55.0	59.7



グループ B

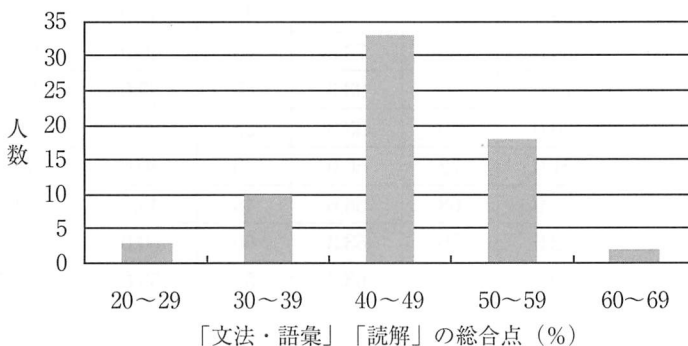
授業プログラム

授業時間数	1年次 基礎的文法の習得を目標とする授業 週1コマ (日本人教官) 言語運用能力の養成を目標とする授業 週1コマ (日本人教官あるいは外国人教官)
クラスサイズ	41名 / 43名
試験実施日	2001年7月 (2年次前期終了時)

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果 - 3

	文法・語彙	%	読解	%
受験者数	71.00		74.00	
合計点	100.00		120.00	
平均値	40.96	40.96	63.40	52.83
合格ライン達成者数	0.00	0.00	4.00	5.41

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果 - 4



グループ C³⁾

授業時間数	1年次第1期（4月～7月） 総合的動機づけのための授業 週2コマ（日本人教官2名） 基本文法・基本語彙習得のための短期集中コース 週3コマ （日本人教官2名+外国人教官1名） 1年次第2期（10月～2月） 総合学習 週5コマ（日本人教官4名+外国人教官1名）
クラスサイズ	昼間主A 24名、昼間主B 26名、夜間主 23名
試験実施日	2001年1月（1年次終了時）

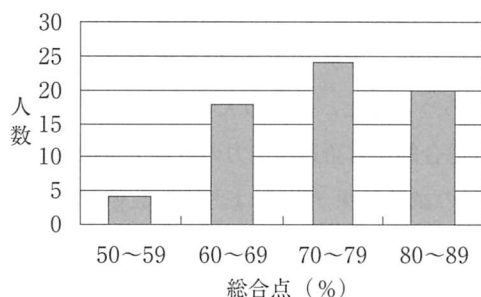
「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－5

	文法・語彙	%	読解	%	聴解	%
受験者数	70.00		71.00		71.00	
合計点	100.00		120.00		100.00	
平均値	75.48	75.48	88.16	73.46	68.94	68.94
合格ライン達成者数	43.00	61.43	38.00	53.52	29.00	40.54

	作文	%	会話	%
受験者数	71.00		66.00	
合計点	80.00		40.00	
平均値	64.25	80.31	28.54	71.35
合格ライン達成者数	54.00	76.06	32.00	48.48

※「会話」に関しては、時間の都合により「ロシア語能力検定試験・初級レベル」に課されている問題の前半のみを実施。

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－6



時間的な制約から、Aグループでは「会話」の試験が、Bグループでは「作文」と「会話」の試験が実施できなかった。Aグループでは「作文」の試験は実施しているが、他の3つの領域、「文法・語彙」「読解」「聴解」と違い「作文」と「会話」の試験は多肢選択問題ではないため、採点基準はあるものの、採点者の主観が混じることは避けられないのではないかと

考えから、今回は多肢選択問題となっている「文法・語彙」「読解」「聴解」のデータのみを対象として分析を進める。また、Bグループでは「聴解」の試験は試みたが、全く聞き取れないということでほとんどの学生が途中で放棄したため、これもデータは挙げていない。試験の実施日は、Aグループは1年生のクラスを担当したため1年生終了時。Bグループは2年生から授業を担当したクラスであるため2年生の前期終了時となっている。

このように、以上のデータは、試験の実施時期、対象学年、実施した試験項目がまちまちではあるが、ここから、言語運用能力の習得を目標とする場合の授業に対し、ある教育環境でどの程度の成果が期待できるかという一定の目安が出てくるのではないかと考える。また、学生に対し各学年ごとのシラバスの中でこういった到達目標を提示できるか、さらには、その到達目標を達成するためのコースデザインの作成に役立つのではないかと考えている。

3. 分析1

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」の基準では、100-120コマ（1コマ45分）の学習時間で合格点である75%の達成が可能であるとされている。それぞれのグループの試験実施時までの総授業時間数を、年間の授業数が前期14週、後期14週の28週として計算すると以下の通りになる。

グループA	90分70コマ
グループB	90分84コマ
グループC	90分112コマ

どのグループでも計算上は必要な時間数は満たしているが、実際にはこの75%を達成できたのは、グループAでは3技能に渡って1名、グループBでは読解のみで4名のみである。この時間数に関しては、試験要綱の中でも「教育環境によっては異なり得る目安である」と注意書きがあるが、毎日のように授業がある場合と週に2～3回の場合、継続的な100コマと間に長期休暇が入る場合、クラスサイズが10名か40名かなど、それぞれの教育条件により当然大きく違ってくる数値であろう。また、日本の大学における語学教育では、必ずしも「読み、書き、話す、聞く」という総合的な言語運用能力の習得を目標として授業が設定されているわけではないことから、この試験結果データは当然の数値であろう。グループCのように、総合的な言語運用能力の習得を目標として授業が設定されており、授業数が年間112コマ、クラスサイズが30人未満⁴⁾、家庭学習もかなりの時間を要求される環境の中で専門にロシア語を学ぶ学生のクラスでも、達成できるのは半数程度である。

今回の調査の目的は、それぞれの教育環境の下で、どれぐらいの時間をかけ、こういった授業を展開すれば、この試験が定める「ロシアの日常生活で必要な初歩的なコミュニケーション能力」を想定した到達度に達することができるのかということを知ることにある。

次に個々の領域の問題の内容を見ながら、具体的にどういった項目が習得に時間がかかっているのかを見ていきたい。困難点については授業を工夫することによって克服できるものなのか、未習項目については工夫次第で1年間の授業のなかに収めることができるのか、また、そもそも、それぞれのグループの教育環境の中で、総合的な言語運用能力の習得を目標に掲げること自体が可能であるのかを検討する。

4. 分析2

「文法・語彙力」テスト

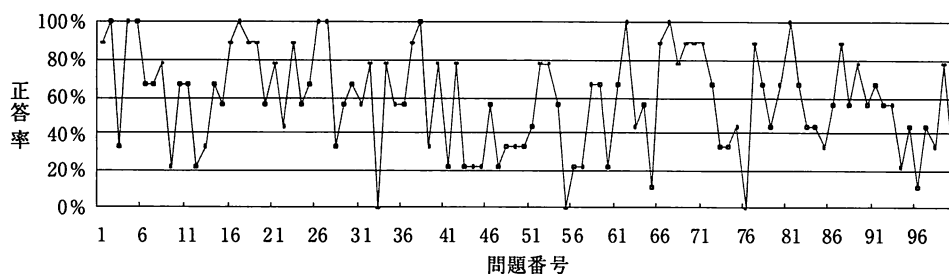
「文法・語彙力」テストは、100題の3択あるいは4択の選択問題からなる。試験時間は50分。

問題例

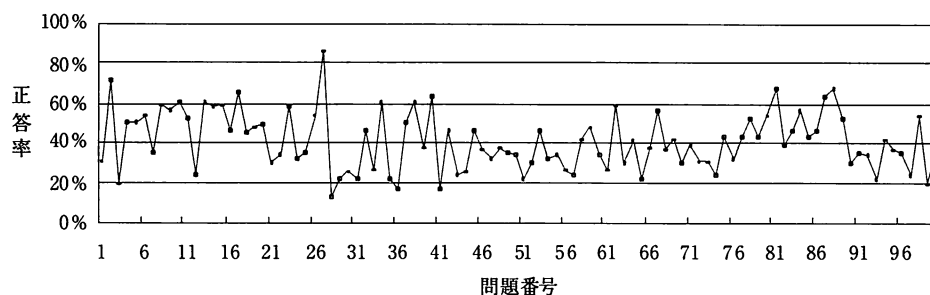
3)	Я всегда смотрю новости ... телевизору.	(A) на (Б) по (B) в
訳) 私はいつもテレビでニュースを見る。(必要な前置詞を選択する)		

21)	Недавно я читала ... книгу.	(A) интересная (Б) интересной (B) интересную
訳) 最近私は面白い本を読んだ。(必要な格形の形容詞を選択する)		

グループ A



グループ B



グラフから、グループBは、未だどの項目も確実な知識となっておらず、定着していない段階であると思われる。グループAのグラフからは、試験実施時に確実に習得されている項目と未習の項目がはっきりと見てとれる。正答率0パーセントの以下の問題は、週3コマの1年生の1年間の授業では授業時間中に一切触れられなかった項目である。

33)	Наташа уже пришла домой с ...	(A) выставка (Б) выставки (B) выставку (Г) выставкой
-----	-------------------------------	---

訳) ナターシャはもう展覧会から家に帰ってきている。
(выставка 「展覧会」 の必要な格形を選択する)

55)	Всем понравилась ...	(A) наша экскурсия (Б) нашей экскурсии (B) нашу экскурсию
-----	----------------------	---

訳) すべての人が我々のエクスカーションを気に入った。
(наша экскурсия 「我々のエクスカーション」 の必要な格形を選択する)

76)	Моя мама часто ... молоко.	(A) купит (Б) купила (B) покупает
-----	----------------------------	-----------------------------------

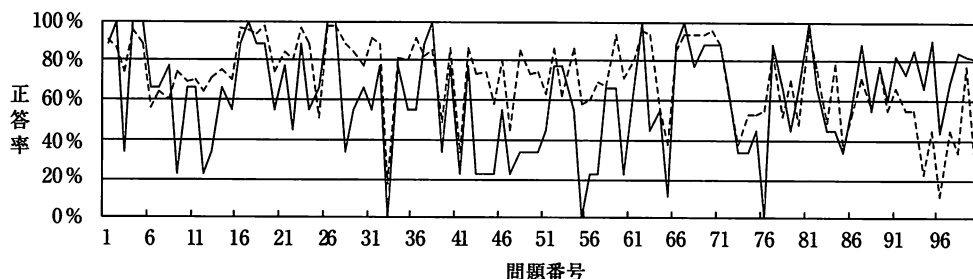
訳) 私の母はしょっちゅうミルクを買う。
(必要なアスペクトと時制での動詞「買う」を選択する)

33) は、前置詞 с に関して、造格を選択することによって「～と一緒に」という意味がでる用法は授業で触れたが、ここでは同じ с という形で、生格を選択し、「～から」という正解が要求されている。前置詞 с のこの用法は未習である。さらに、名詞 выставка 「展覧会」を学生は知らない。55) は、動詞 понравиться 「気に入る」が未習。76) は、不完了アスペクトの動詞 покупать が未習であり、すべての学生が既習の完了体アスペクトの動詞 купить を選んだ。

下にCグループのデータを実線で、Aグループのデータを破線で示したグラフを挙げるが、CグループAグループともに極端に正答率の低い33) に関して、ほとんどの学生が造格形を選択している。これは、Cグループで使われた教科書でも、Aグループで使われた教科書でも выставка 「展覧会」という語が登場しなかったため、この語彙を知らないことからくる誤答であり、こういった誤答は、この語彙一つを知ることにより是正されることなのでさほどの問題はないと思われる。

CグループとAグループで、ほとんど同じ波形を描いている72)～90)は「動詞のアスペクト」と「運動の動詞」の用法を問う出題である。「動詞のアスペクト」と「運動の動詞」の用法は、ロシア語の文法の中でも最も難しいとされる項目であり、習得にかなりの時間を要し、1年生の段階では、授業の中で語彙を限って説明していくため、授業中に学んだ語彙の部分だけ正答率が高くなっている。

日本の大学におけるロシア語能力検定試験実施の試み（北岡）



次に、破線の数値が実線の数値よりかなり低い項目に関して検討してみると、91)～100)は複文を構成する「接続詞」「関係詞」の用法を問う出題であるが、Aグループでは、1年間の授業の中で、「複文」にまで触れることはできなかった。

問題例

96)	Маленький Саша любит, ... мама играет с ним.	(А) когда (Б) потому что (В) почему
-----	--	-------------------------------------

訳) 小さなサーシャは好き、お母さんが彼と遊んでくれる...
(A) とき (B) なぜなら (B) なぜ

9)は動詞 *изучать* と *учиться* 「学ぶ」の、12)、13)は *звать* と *называться* 「～と名づけられている」の用法の違いを問う出題であり、また39)～65)は形容詞、名詞、代名詞の格形を問う問題である。これらの項目は、どちらのグループでも既習の項目ではあるが、動詞に関する意味的・文法的な細かな用法の違いや、6つの格の用法がしっかりと定着するには、日常的にロシア語を聞き話す環境にない場合、かなり意識的に記憶する努力を要する。この点に関してのAグループのデータとCグループのデータの差は、授業時間数の差に加え、学生の家庭学習にかかる時間と、学ぶ言語を運用しようということに対するモチベーションの度合いの差が現れていると思われる。

「読解力」テスト

試験時間は45分。辞書の使用可。問題番号1～10は1文で書かれた情報の理解を問う。

問題例

Какую газету Вы купите вашему русскому другу, если он любит ... ?

3)	читать о молодежи	(A) "Культура" (Б) "Спорт"
4)	футбол	(B) "Я - молодой" (Г) "Литературная газета"

訳) ロシア人の友人にどんな新聞を買いますか、彼が...を好きなら?

3) 若者について読むのが 4) サッカーが

選択肢：(A) 「カルチャー」(B) 「スポーツ」(B) 「私は若い」(Г) 「文学新聞」

問題番号 11～30 では、250 - 300 語のテキストからなる、アブハジアの作家イスカンデルがモスクワに出て大学を選び入学する話が3つの部分に分けて提示される。出題は、それぞれの部分に適切な題名をつけること（3択）と、内容に関する3択問題。

問題例

23)	Я делал много ошибок, потому что...	(A) я очень плохо знал русский язык (Б) я долго ехал и очень устал (B) так обычно говорят жители Абхазии
-----	-------------------------------------	--

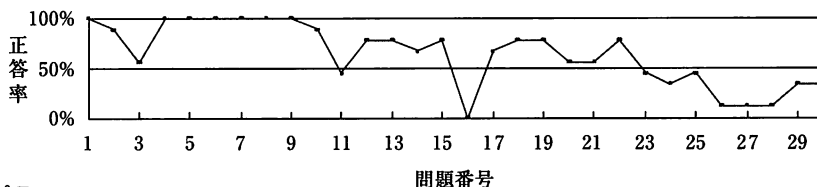
訳) 私はたくさん間違いをしました。なぜなら...

選択肢：(A) 私はロシア語をよく知らなかった (B) 道中が長く大変疲れていた
 (B) アブハジアの人たちは普段そういうふう話す

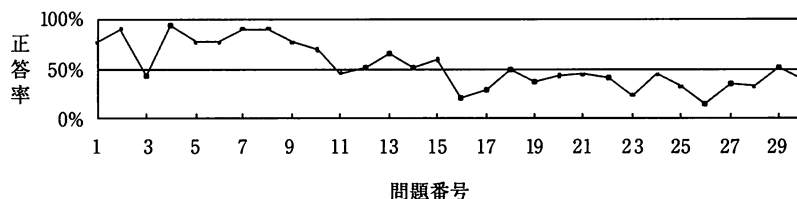
どのグループでも他に比して「読解力」テストの得点率が高い。Cグループでは、後期に週の5コマのうち1コマが講読の授業であるが、Aグループに関しては、1年間ほとんど辞書を使うことはなかった。それにもかかわらず「読解力」テストの得点率が高いのは、辞書を使って文章を読んでいく力は、高校までの英語学習の中で培われてきた力が影響しているのか、あるいはまた、林田（2001）で指摘されているように、読解力テストが他に比べて問題そのものが易しすぎるとも考えられる。

問題番号 11) 以降の長文読解は、1部 11)～15)、2部 16)～25)、3部 26)～30)に分かれており、グループ A、Bともに後半に正答率が低いのは、学生の記憶している語彙数が必要とされる語彙数 780 語よりはるかに少ないため、辞書を引く作業に時間がかかりすぎ、時間内に正確な把握ができないことによると思われる。グループ A のグラフで 26)～30) で正答率が極端に下がるのは、時間不足でほとんどの学生が3部を読めていないことによる。また、正答率の低い 16) の問題は、「動詞のアスペクト」が絡む問題であり、ここでとりあげられている語彙は A グループでは未習項目である。

グループ A



グループ B



「聴解力」テスト

試験時間 25 分。問題番号 1)～5) では、1 文で話される情報を聞き取る。

問題例

4) Марта приехала в Москву из Испании. 訳) マルタはスペインからモスクワに来ました。

(A) Марта сейчас в Москве.	訳) (A) マルタは今モスクワにいます。
(B) Марта сейчас в Испании.	(B) マルタは今スペインにいます。
(B) Марта поедет в Москву завтра.	(B) マルタは明日モスクワへ行きます。

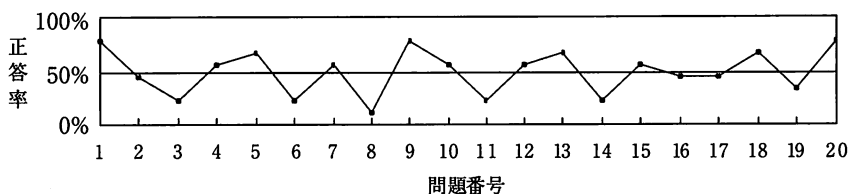
6)～8) では、それぞれに 5～6 の短いセンテンスからなるダイアログを聞き、その会話がどこで行われたかという情報を得る。9)～16) は、「誕生日に友だちに何をプレゼントすればいいか」というテーマでのおばあさんと少年の会話から情報を聞き取る。17)～20) では、約 100 語からなる「エクスカーションへの誘い」をテーマとしたモノログから情報を聞き取る。すべて選択肢 3 つからの選択問題。

「聴解力」テストの結果は、最も考えさせられるところである。B グループの学生が途中で放棄するほどになにもわからなかったこと、A グループの学生からも、試験後、ほとんど聞き取れなかったという感想を聞いている。

どの授業でも、教材付属のテープがあり授業時間にも利用するが、これは専ら発音練習のために使用しているのであり、特に聴解力を養うことを目的とした訓練はなされていない。また、筆者が 1 年生を担当した A グループの授業では、週に 1 コマのネイティブスピーカーの授業に加え、筆者の授業でもできるだけロシア語による質疑応答などを多くし、授業の中で十分にロシア語を聞かせてきたつもりであったが、この試験を実施することにより、改めて、パターン化された文章による質疑応答や、シチュエーションが明らかな中での対話による理解と、モノログであってもダイアログであっても、テープから流れる音からだけで理解することに必要な言語運用能力と間には大きな差があるということを再認識させられた。

なによりも、ここで問題になるのは、学生の語彙力であるように思われる。記憶している語彙があまりにも少ないことと、記憶された語彙も、その語彙が示す概念に直結するような形で記憶されていない。またさらに、教室での限られた時間の中では、その言語の文化的背景、ロシア人の習慣などの情報を与えることのできる機会も限られ、テープから流れてくる会話が行われているシチュエーションをすぐに想像することが難しく、このことも、リスニングの困難さの原因となっていると思われる。

グループ A



5. まとめ

大学における初修外国語の初級の授業では、新たに学ぶ外国語の文法体系の一通りの概観を紹介するだけに終わってしまいがちであるが、総合的な言語運用能力の習得を目標とする場合、初級の段階から「読み、書き、話す、聞く」という4技能をバランスよく習得することが求められる。この4技能をバランスよく習得していくためには、特に授業時間数が少ない場合、授業内容自体の抜本的な変革が必要であると思われる。

ここに、もう一つのデータを紹介する。これは、Aグループの大学の同じ条件で学んだ2000年度3年生の前期が終わったときに行った同じ試験の実施結果データである。上であげた1年生のデータと比較すると、1年生より低い数値となっている。

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－7（3年生）

	文法・語彙	%	読解	%	聴解	%	総合点	%
受験者数	7.00		7.00		7.00		7.00	
合計点	100.00		120.00		100.00		320.00	
平均値	50.71	50.71	72.00	60.00	41.43	41.43	164.14	51.29

「ロシア語能力検定試験・初級レベル」試験実施結果－1b（1年生）

	文法・語彙	%	読解	%	聴解	%	総合点	%
受験者数	8.00		8.00		8.00		8.00	
合計点	100.00		120.00		100.00		320.00	
平均値	56.75	56.75	75.00	62.48	48.75	48.75	180.50	56.40

もちろん、このような人数の少ないクラスのデータでは、一人モチベーションの高い学生がいると平均値も大きく違ってくるため、単純な比較はできないが、ここで、この2つのクラスでは授業の進め方に大きな違いがあったことを報告しておきたい。この2000年度3年生のクラスでは、1年生でネイティブの授業がなかったことやチームティーチングが上手く機能し

ていなかったことなど、数値の低いことの様々な要因が考えられる。このクラスが1年生であったときの授業では、教師間で多少の連絡は取り合っていたものの、週3コマを担当する教官がそれぞれに全く連動しない教科書で各々の授業を進めた。このようにチームティーチングがほとんどない状況の中で、学生の混乱が見て取れた。2000年度1年生のクラスでは、各クラスで教科書は異なるものを使っていたものの、その週に教える文法事項をある程度そろえていくように教師間の連絡を密にした。上記のデータは、授業の改善からある一定の成果があったことを示していると見ている。

しかし、いくら合理的に授業を進めても、語彙や文法項目をただ紹介するだけでなく、ある程度定着することを目標に授業を進める場合、試験実施結果データに見た通り、ロシア語能力検定試験で初級レベルと定められている文法項目すらすべてを1年間の授業で消化することはできない。このことから、言語運用能力の習得を学習の目標とする場合、基礎的な文法項目を着実に習得するためには、1年間の授業の中でのチームティーチングの必要性はもちろんのこと、さらには、2年間に渡っての継続性のあるコースデザインの作成とそれに見合った教材開発が必要であると思われる。また、パターン化された文章による質疑応答や教科書に書かれた練習問題を順番にこなすだけでは決して語彙のその語彙が示す概念と直結される形での定着は望まれない。語彙の記憶と定着を学生の授業時間外の努力にたよるのではなく、授業の中である程度道筋をつけるためには、授業の中で、学生それぞれの思考に基づく発話を通しての練習を積み重ねる必要がある。そのためには、グループBのような大人数のクラスでは、可能ならば、ティーチングアシスタントの起用による少人数ずつに分けたグループ学習などが助けになるのではないだろうか。またさらに、授業時間の不足を補うための効果的な自習用補助教材の開発も望まれる。特に、語彙力を養い、文化的背景の情報を与え得るような魅力的なリスニング教材の開発ができないものと目下模索中である。

注

- 1) 2000年度から大阪外国語大学でロシア語を専門とする学生を対象にこの試験が実施され、その試験結果データがカリキュラムやコースデザインの検討に利用されている。林田（2001）に2000年度の実施結果データの詳細な分析が報告されている。
- 2) 本稿に試験の成績を掲載することは受講生の承諾を得ている。受講生の協力を謝意を表したい。また、Aグループの試験では、共にこのクラスを担当する須佐多恵先生にご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。
- 3) Cグループのデータは、大阪外国語大学ロシア語専攻1年生の試験実施結果である。このデータに関しては大阪外国語大学ロシア語専攻から掲載の許可を得ている。
- 4) Cグループでは、ネイティブの会話の授業にはさらにクラスを分け、10人程度のグループで授業が行われる。日本人教官の授業でも、ロシア人留学生、日本人大学院生のTAが2名授業に加わり、通常の20数名のクラスを3分割してグループで話すような形態の授業も行われている。

参考文献

Государственный образовательный Стандарт по русскому языку как иностранному.

Элементарный уровень. Общее владение. 2001, Москва - Санкт-Петербург.

Государственный образовательный Стандарт по русскому языку как иностранному.

Базовый уровень. Общее владение. 2001, Москва - Санкт-Петербург.

Государственный образовательный Стандарт по русскому языку как иностранному.

I сертификационный уровень. Общее владение. 2001, Москва - Санкт-Петербург.

Государственный образовательный Стандарт по русскому языку как иностранному.

II сертификационный уровень. Общее владение. 1999, Москва - Санкт-Петербург.

Государственный образовательный Стандарт по русскому языку как иностранному.

III сертификационный уровень. Общее владение. 1999, Москва - Санкт-Петербург.

Лексический минимум по русскому языку как иностранному.

Элементарный уровень. Общее владение. 2000, Москва - Санкт-Петербург.

Типовые тесты по русскому языку как иностранному.

Элементарный уровень. Общее владение. 1999, Москва - Санкт-Петербург.

林田理恵 2001 「ロシア語能力検定試験の実施とその結果」『多文化共存時代の言語教育』大阪外国語
大学